

6. 学生の自立的な学びを支援する大学図書館の役割

運営委員 梶田 晶子（東海大学）
久保田 学（早稲田大学）
アドバイザー牛崎 進（立教大学）

1. 分科会のねらい

主体的に学ぶことが要求される大学の授業において、学生のスタディスキルズ（学びの技法）が十分でない中、学生の自立的な学びを支援する様々な取り組みが各校で進められている。そうした取り組みが活発化する中、大学図書館がその専門性を生かして行う支援プログラムに注目が集まっている。

本分科会は、参加各校が進める学習支援に関連した取り組み事例（取り組みの大小や形式にとらわれず幅広い事例）の研究と参加者相互のディスカッションを通じて、それぞれの取り組みが持つ意味や目的について理解を深めることを初期の目標として、最終的には大学の教育目標を達成する上で図書館が取り組むべき支援策および図書館職員が担うべき支援業務についての基本的な方向性を見出して、これにもとづく戦略的、実践的なプログラム案を作成することを目標とした。

2. 討議テーマ

- ・ 自立的な学びに必要なスタディスキルズ（学びの技法）を育むための支援プログラムを検討する（学習支援）
- ・ 学生自らが主体的に学ぶ教育への転換を図るにあたって図書館に求められる機能と役割を明らかにし、図書館に備えるべき学びの環境を具体化する（学習環境）
- ・ 教育用コンテンツの蓄積や著作権処理など、図書館が学習支援に取り組むうえで検討すべき課題を整理する（課題抽出）
- ・ 学習支援室や教育開発センター、情報センターなど他の部局と連携した組織的な学習支援体制の中で果たすべき図書館の機能を明らかにする（学内連携）

3. 討議の概要

（1）全体的な流れ

① メーリングリストによる事前ディスカッション

事前研修として自大学および自大学図書館の概要紹介（レポート）および学習支援に関わる自大学の取り組み紹介を中心としたディスカッション（メーリングリスト）を行った。限られた期間ではあったが情報共有が進み、参加者は一定程度の相互理解とテーマに対する共通認識を獲得して研修に参加した。

② 事例研究

全体会の事例研究において、本分科会のテーマと直結した明治大学の事例「図書館員による学習支援」（2007年度特色GP採択）が紹介された。講師の飯澤氏に発表後も引き続き当分科会の討議に参加いただき、初日の分科会は明治大学の事例研究に時間を充てた。

明治大学では、図書館が正課カリキュラムと連携しながら学習支援を展開している。

分科会では、全体会で取り上げられなかった詳細な取り組み内容について十分な補足説明を受けて理解を深めることができた。特に、明治大学がこの取り組みを実現するに至った背景と経緯の中には、大学と大学図書館を取り巻く共通的な課題が数多く含まれていたため参加者の共感を集めるとともに問題の共有化が促進された。

③ 事例紹介

アドバイザーである牛崎氏による事例発表「私立大学、学習支援、図書館」は、私立大学と大学図書館が抱える諸課題を包括的に取り扱ったもので、この問題提起により、明治大学、立教大学の具体的事例を通じた「大学図書館の抱える諸課題と使命が浮き彫り」となり討議は一層深まった。

久保田委員からは図書館から離れて、大学が進める学習支援に関連した取り組みの事例として、英語、日本語、数学の基盤教育（アカデミックリテラシー）への取り組みが発表された。

④ グループ討議

グループ討議は、討議テーマに照らしながら各校における大小様々な取り組み事例を参加者が相互に紹介して論点整理を進め、グループそれぞれのアプローチによる結論を導き出した。事前研修から事例紹介までのプロセスで課題が鮮明になっていたこともあってグループ討議はスムーズに進行し、4グループ共、学習支援、学習環境、学内連携の3つの討議テーマに沿って結論を導き出した。

⑤ 事後研修

事後研修として次の2つの課題を出した。1つは、11月末までにメーリングリストを活用してグループ報告書をまとめること、2つ目は、12月末までに研修最終日に提出したアクションプラン（大学に戻ってから直ぐに実施するもの、計画的に実施したいもの）のうち、直ぐに手がけるものについてメーリングリスト上に報告を提出することであった。これらについては本稿執筆段階では実施中である。

また、2008年12月5日、明治大学の協力を得て明治大学生田図書館の施設見学と「図書館活用法」授業を聴講させていただく見学会が実現した。日帰りで参加可能なメンバーに限定された任意参加の企画であったが、事例研究で紹介された実際の現場を訪れる大変貴重な機会となった。「図書館活用法」の授業見学では本分科会にも参加した担当職員が実際に正課授業の教壇に立つ現場を聴講させていただいた。入念に準備された授業内容に学生共々見学者も大いに引きつけられ、学生が熱心に受講している姿が印象的であった。生田図書館には特色GPによって実現した設備を含め充実した最新の環境が整備されていた。高台のキャンパスに展開する施設は大変良質な学習環境との印象であった。

(2) ミニ事例紹介等

① 図書館員による学習支援（明治大学 飯澤 文夫氏）

全体会では紹介されなかった取り組み事例の詳細と導入までの経緯および背景説明。

② 私立大学、学習支援、図書館（立教大学 牛崎氏（アドバイザー））

私立大学を取り巻く環境の変化と学習支援への取り組みの意味を認識し、大学が組織として今後どのように学習支援に取り組んでいくべきか、そこで図書館が担うべき役割とは何かについて立教大学の事例も交えて紹介された。

③ 早稲田大学の取り組み（早稲田大学 久保田委員）

早稲田大学における大学改革の概要とその柱のひとつとなっているリテラシー教育への取り組み事例の紹介。

(3) 討議内容

① 分科会全体の討議内容

明治大学の大規模な事例を皮切りに各大学図書館が努力と工夫を重ね実施している取り組みの紹介や活発な意見交換が行われた。参加者は、それらを自分の状況に重ね合わせ、ヒントやアイデアあるいは気付きを得、研修成果として持ち帰ることができた。何よりも図書館職員という枠から大学構成員へと意識変革をしつつ、教員や他部署と連携し、図書館員が持つ専門性やスキルを発揮する必要があることを意識したうえで、図書館が学習支援の推進役として今後果たすべき役割や学内連携の重要性などについて理解を進めた。

具体的な学習支援プログラムとして、スタディスキルは初修年次で取組む例が多いが、論文作成は3年次以降に必要性が高くなることから、ガイダンスの機会だけではなく上級学年を対象にしたゼミツアーは有効との意見が多かった。また、活字離れや図書館来館が積極的でない現状を見据え、来館を受動的に待つのではなく、Webも活用しながら図書館から学生、教職員へ様々な施策を働きかける積極的な提案が出された。事前研修および詳細な事例研究を通じて討議テーマに対する共通理解を持って、図書館が取り組むべき支援策および図書館職員が担うべき支援業務についての基本的な方向性を見出すことができた。

② グループの討議内容

< Aグループ >

グループ内で挙げられた様々な学習支援の事例を、オリエンテーションや講習会などの図書館の直接的支援と、施設、資料の充実などの間接的支援に大別して整理した。また各校の各種取り組みに関連して、オリエンテーション等への自主的参加者の減少や図書館サービスの認知度の低さなど共通の課題を抱えていることが判明した。そしてこれら共通的な課題に図書館はどのような働きかけを行ってきたか、頼られる図書館になっていたかといった反省も踏まえ、次の提案が行われた。

- ① 図書館を知ってもらうために、学生・教員・他部署へ図書館をアピールしよう
- ② 他部署・教員とのコミュニケーションを取り、頼みたくなる図書館になろう
- ③ 建学の理念を意識し、校歌を3番まで歌えるようにしよう

これまでは、大学（教員・他部署など）と図書館が別々に学習支援をしている状況であった。しかし、今後は大学の心臓部として教員や他部署と連携し、図書館職員も大学の職員であるという自覚をもって学習支援をしていく必要があるとの結論を得た。

< Bグループ >

「情報リテラシー教育」「図書館利用の促進」「理解される図書館」の3つのテーマに沿って議論が進められた。特に「情報リテラシー教育」については、多くの図書館が実施する利用教育としてのガイダンスが最も学習支援に近い取り組みであるとの認識に立ち、このガイダンスを学生の自立的学習の支援に結びつけるには、単なる文献検索方法の説明に終始している現在の内容では不十分で、情報センターなどとも連携して、論文・レポートを作成するプロセスの全てを網羅する専門性の高い支援プログラムを、むしろ図書館が中心となって作り上げるべきではないかという結論を得た。

< Cグループ >

1つは利用教育、2つ目に魅力的な「学びの場」をつくること、3つ目は学内連携の3つの柱

が有機的に働くことで課題の解決を図ることを目指して討議を進め、それぞれ次の目標を立てた。

- ・ 5段階の利用教育（「動機づけ」から「情報表現法指導」まで）の実現
- ・ 学生・教員・他部署の職員から頼られる図書館を目指して
- ・ 魅力的な「学びの場」としての図書館（施設・設備、環境）

以上3つの柱で議論して導きだした結論「問題解決型学習の創出」「学生満足度の向上」「大学職員としての学習支援コーディネート」を三位一体で推進することが、学生に“自立的な学習を習慣づける”ための今後の図書館（職員）が担うべき役割であるとの結論を得た。

<Dグループ>

討議テーマに沿って各校の取り組み事例を研究して、自主的な学びに必要なスタディスキル、図書館として行うべき環境の整備、教育用コンテンツの蓄積、他部局・学外との連携等の各項目について議論した。

特に、魅力ある図書館とするための具体的な改善案として、既成概念に捉われない斬新で幅広い利用者サービス案（飲食自由化、開館時間延長、選書ツアー、銀行窓口の案内係の設置など）を策定した。また、各校で様々に進められる先進的な取り組みをコンテンツとして共有していく方向性についても議論された。

4. まとめ

(1) 分科会のねらいに対する結論

研修終了後、5段階評価による4つの設問および記述回答によるアンケート調査を行った（参加者28名、有効回答数27件）。

- ① 自立的な学びに必要なスタディスキルズを育む支援について具体的なイメージが描けた
十分に達成できた (6) まあまあ達成できた (21) どちらともいえない (1)
- ② 自立的な学びを支援する図書館の機能と役割、図書館員が担う業務について基本的な考え方が明確になった
十分に達成できた (11) まあまあ達成できた (16) どちらともいえない (1)
- ③ 教育用コンテンツの蓄積や著作権処理などの課題が整理できた
十分に達成できた (5) まあまあ達成できた (7) どちらともいえない (12)
あまり達成できなかった (4)
- ④ 上記にもとづく実践的な支援プログラム案を描けた
十分に達成できた (4) まあまあ達成できた (19) どちらともいえない (4)
あまり達成できなかった (1)

①、②、④については、7割以上の回答が「十分に達成できた」または「まあまあ達成できた」としている。一方、③教育用コンテンツの蓄積や著作権処理などの課題が整理できた、については評価が低く、実際研修では著作権処理等についての話題提供が十分ではなかった点は反省点である。

自由記述も含めた全体の意見を集約すると、教員や他部署と連携して具体的な方策を実現したい、図書館職員としての意識と大学職員としての意識の両方を持って考えたい、学習支援という新たな発想の下で図書館の殻を破って役割を果たしていきたいとする代表的意見など積極的な意見が大半を占め、分科会としてのねらいは達成できたと考えられる。

(2) 討議テーマに対する結論

今回の分科会の最大の収穫は、他部署とも連携した学習支援プログラムの展開を、参加者の大半が恐らくは初めて考えた点ではないだろうか。これまで図書館は教学系組織の構成員である教職員とは一線を画した立場で利用者支援や利用教育を行ってきた。そこでのユーザーは学生だけではなく教員であり職員である。つまり教職員を客として見立ててしまったために「連携」の対象と考えるばかりか図書館員と大学職員の間には線を引き自分達は図書館員であると定義してしまったのである。では何故図書館員は視点を変えることができたのだろうか。それは飯澤氏の次の言葉に凝縮されていたように思う。飯澤氏は「われわれ図書館員は自らを限界集落と呼んでいる」として、特色 GP 申請を決断された時期のことを振り返られた。私立大学におけるコスト削減の波は対面サービス主体の図書館にその矛先が向けられ、図書館業務は業務委託と派遣社員化を続けた結果、最少の職員数での運営を余儀なくされるに至った。結果、これ以上一人でも職員が欠ければ運営できなくなる限界にまで人が減らされたのである。図書館が大学で存在意義を発揮するための積極的な動きが学習支援であるとすれば、「学びの場」として図書館再生の活発な動きが各校で起きてくるのは時間の問題である。